

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：21402

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652128

研究課題名(和文) 地域連携による「外国語活動総合教育システム」のモデル構築と検証

研究課題名(英文) Regionally-Coordinated Educational System for Foreign Language Activities: Its Model Proposal

研究代表者

Sykes J・Denby (Sykes, J. Denby)

国際教養大学・国際教養学部・講師

研究者番号：50592911

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円、(間接経費) 810,000円

研究成果の概要(和文)：小学校の「外国語活動」の内容を充実させ意義あるものとするため、大学、小学校、大学間交流協定大学、地方教育委員会の4者による連携組織「外国語活動総合教育システム」を構築した。日本のFLEXの在り方を模索しながら、教員養成および教員研修のモデルを提示した。大学の知的資源と協定大学を含む人的資源を活用しながら、小学校および教育委員会と連携して地域連携型が国内版、海外版として実施され得ること、そして、それらは発展性をもつものとして、モデルの提示ができたことは、意義のある研究であったと解釈できる。

研究成果の概要(英文)：In this research project, a "Regionally-coordinated educational system" has been experimentally constructed for the purpose of developing Foreign Language Activities at Japanese elementary school into a more significant and effective first stage of English education. The regionally-coordinated education system include university, overseas university with inter-university agreement, elementary school, and board of education as its organization. Functionally, academic and human resources at the university and the overseas university were employed to design and implement pre-service and in-service teacher education with practical support from elementary school and administrative support from board of education, while seeking for a clearer idea of Foreign Language Activities as FLEX in the Japanese settings. The teacher education model is proposed both as local and overseas versions with possibility of improvement and varied development.

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：挑戦的萌芽研究

キーワード：外国語活動 FLEX 教員養成 教員研修

### 1. 研究開始当初の背景

小学校における「外国語活動」は、その目的と意義が十分に理解された上で実践され、効果について検証される必要がある。平成23年度から新学習指導要領が全面実施され、外国語活動が必修化され、第5学年、第6学年に対して年間35単位時間実施される。本来あるべき姿の「外国語活動」を実現するためには、FLEX (Foreign Language Exploration) の意義、内容、方法を理解し、日本の社会文化的環境に適切なFLEXの形を明確にし、継続的に実践と検証を行うことが必要である。しかしながら、大学における「外国語活動」を担当できる知識と技能を身に付けさせる教員養成は端緒についたばかりであり、現職教員研修についてもFLEXとしての「外国語活動」についての理解が曖昧なまま進行している様子が見受けられる。したがって、外国語活動が効果的に実施されるためには、教員養成・教員研修の充実発展は急務である。

本研究者らは、教員養成や異文化に対する積極的な態度を養成する外国語教育の研究に携わる者として、日本の外国語教育が「FLEXとしての外国語活動」を出発点として発展するための手立てとして、地域連携による「外国語活動総合教育システム」の構築を試みた。

### 2. 研究の目的

小学校の「外国語活動」の内容を充実させ意義あるものにするためには、「外国語活動」の目的を十分に理解し実現させる教育連携体制の組織作りと、実施効果の検証が必要である。本研究の目的は、「外国語教育資料相談室および教員養成機関」としての大学、「外国語活動の教育現場」としての小学校、「海外教員研修機関」としての大学間交流協定大学、「教育者間連携推進機能」を担う地方教育委員会の4者による連携組織「外国語活動総合教育システム」を構築し、「FLEXとしての外国語活動」を発展させると共に、教員養成および教員研修を充実させ、それらの効果を検証することを目的とする。地域における信頼関係に裏付けされた確かな連携は、発展途上にある「外国語活動」を進化するシステムとなり得ることが期待される。

### 3. 研究の方法

本研究は、(1) FLEXとしての外国語活動の理解と理論的適切化、(2) 「外国語活動総合教育システム」の構築、(3) FLEXとしての外国語活動の実施および外国語活動の教員養成・研修の実施、(4) 「外国語活動総合教育システム」の評価の4本柱で構成されている。1年目は、上記(1)および(2)に、2年目は(3)に、3年目は(4)に取組む。(1)では、FLEXとしての外国語活動の先進国の例を実際に現地で観察記録し、意義と問題点について理解を深める。(1)で得られた知見をシステム参加関係者で共有しながら、(2)の「外国語活動総合教育システム」の構築を進め、外国語

活動の実実施計画と教員養成・研修の計画を練り上げる。(3)の段階では、連携システムを機能させながら計画を実施し、実践データを保存し集積する。データ分析を同時に行い、問題点を逐次継続的に改善していく。(4)の段階では、日本の社会文化的環境に適したFLEXとしての外国語活動の実施結果および教員養成・研修の実施結果のデータを基に、その効果について評価する。

(1) FLEXとしての外国語活動の理解と理論的適切化

外国語教育により国や地域の共生発展を進めている先進国を現地視察する。特に、Council of Europe の White Paper on Intercultural Dialogue (2008) と American Council on Teaching of Foreign Languages による Standards for Foreign Language Learning (1998) に書かれてある理念を念頭に置き、最新の動向についての調査を進める。(2) 「外国語活動総合教育システム」の構築・実践・評価

FLEXとしての外国語活動のあるべき姿について、ディスカッションを経ながら参加関係者が共有し、それぞれの役割を相互認識する。共通理解と役割認識に基づいて、あるべき姿を実現させる連携システムのモデルを具体的に構築し、試験的に実践し、成果と課題を明らかにする。

外国語活動 (外国語教育)

外国語活動に関わる教員や外国語教育関係者、海外協定大学、留学生、大学生との意見交換を行い、「FLEXとしての外国語活動」を計画し、実施する。成果と課題について考察する。

教員養成・教員研修

教員養成においては、フィールド・インターンシップ型教育を受けられるよう、小学校と教育委員会からの支援体制を確立し、事前準備、教育現場での実習、事後報告という一連の教育活動が有意義に行われるよう、具体的計画を作成する。言語や文化の体験的理解という視点においては、協定校大学、ALT、留学生との交流を組み込む。「FLEXとしての外国語活動」の理解に基づく実践を目標とする。試験的に実施し、その成果と課題について考察する。

現職教員の研修は、大学と海外協定大学との連携で行う。資料面では、様々な外国語の言語文化資料、教授法・教材資料を豊かにし、適宜アドバイスを与えるシステムを構築する。実践研修面では、海外協定校大学との協力体制(Tandem Teaching)を確立する。日本での研修に加え、教員自身がFLEXの意義を異文化の中で生活しながら実感し、さらに日本で適切なフォローアップを受けられるようなTandem Teachingシステムのモデルを構築する。試験的に実施し、その成果と課題について考察する。

については、実際に連携して実施することは容易でないことが予測されるため、本研

究では、 の取り組みに重点を置き、教員養成及び教員研修を進める中で、 の実施に努める。

#### 4. 研究成果

##### (1) FLEXとしての外国語活動の理解と理論的適切化

他国の早期英語教育の実際の様子を現地視察し、日本の外国語活動について客観的な示唆を得られることを期待し、スウェーデンとスペインの小学校を訪問し参与観察した。

スウェーデンとスペインではかなり事情が異なっていた。スウェーデンでは英語に触れる機会が小学校入学前から豊富にある。両親は英語を話し、メディアも英語を介したものが多くことから、児童の動機づけも能力も高い。本格的な英語の授業は3年生からであるが、1年生から英語に触れるようになっている。週2~3時間で、クラスサイズは17人から27人と規模は小さい。教師は英語母語話者ではないが、かなり高い英語能力を持っている。授業内容は学習者中心であり、グループ活動が多かった。各教室にインタラクティブ・ホワイト・ボードが設置されていることから、教育にかける予算も高いと思われた。

一方、スペインの英語教育事情は、日本と似通っている点が少なくなかった。開始学年が3年生の学校を訪問したが、クラスサイズは40人であり、英語母語話者の活用はなかった。40人というクラスサイズのためか、観察した授業はいずれも教師中心の授業であった。

スウェーデンもスペインも、日本のFLEXとは異なり、言語習得が目的とされていた。日本で言語習得を目的とした早期教育を実施するためには、教員養成の充実が強く望まれる。組織的に外国語活動のための教員養成が整備されていない段階で、また、言語習得を目的とした早期英語教育の導入段階として、FLEXが採用されざるを得なかったという見方もあるが、今後ヨーロッパのように言語習得を目的とした方向になることは必至である。

スウェーデンのように幼い頃から日常生活において英語に豊かに触れる環境は、日本ではあり得ない。スウェーデンの就学前の環境が生み出す効果、すなわち動機づけや楽しく外国語に触れる経験を、日本では学校におけるFLEXとしての外国語活動で実現する必要がある。また、授業の方法にしても、学習者の動機づけをそのまま生かした学習者中心の授業方法を模索していくべきである。スウェーデンの英語教育はそのことを裏付ける例ととれるかもしれない。

スペインの事例のようにクラスサイズが授業方法に与える制約についてより重要な問題として捉える必要がある。FLEXでは、個人の言語発達について留意する必要があるのかもしれないが、言語習得を目的とするとすると、一人ひとりの児童の言語習得

を丁寧に看取っていく必要があることを示唆していると考察する。

##### (2) 「外国語活動総合教育システム」の構築・実践・評価

FLEXとしての外国語活動のあるべき姿について、ディスカッションを経ながら参加関係者が共有し、それぞれの役割を相互認識する。共通理解と役割認識に基づいて、あるべき姿を実現させる連携システムのモデルを具体的に構築し、試験的に実践し、成果と課題を明らかにする。

##### 外国語活動（外国語教育）

FLEXが動機づけを重視し、体験的に外国語や異文化に触れながら、基本的な音声や表現に慣れ親しみ、外国語学習へ導入する教授法であることから、大学、附属小学校、大学間交流協定大学の3者が連携し、外国の小学校との教育交流のモデル実践例を試みた。具体的には、平成24年度には協定大学のオーストラリアのグリフィス大学からの留学生が参加した授業を実施し、平成24、25年度にはSkypeを通信手段としたインターネット上での交流という形態で、オーストラリアのセント・ピーター・ポールズ・スクールと合同授業を行った。この小学校は協定大学から紹介してもらったものである。オーストラリア人の日本語を教える教員とその生徒たちとの教育交流を実施した。このように、協定校からの留学生が授業のアシスタントとして、または、協定校大学から紹介された小学校が交流相手となって、異文化間コミュニケーションを実際に経験し、言語や文化を体験的に理解し、基本的な音声や表現に慣れ親しみ、コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度を養うという目的にアプローチする統合的な外国語活動を継続して実施した（26年度6月も交流）。本実践は、外国の小学校との教育交流のモデルとして、公立小学校での実施の提案事例として活用され得る。

##### 教員養成・教員研修

教員養成としての試みは、平成23、24、25年度も継続して行ったフィールド・インターンシップを活用した発見的問題解決学習を実施の実践である。近隣の小学校に参与観察をさせていただき、問題点の発見、他の学生との共有と理解の深化、模擬授業による問題解決の提案という流れで、学習を展開した。現場での外国語活動の実際を知った上で、外国語活動の理念、あるべき姿、実現の可能性と課題についてより深く追究する形態として、英語教員養成のひとつのモデルとして提案できる形として定着してきている。大学、小学校、教育員会の3者の連携が生きた形となっている。

教員研修としての試みのひとつとして、「英語教育オープン研修セミナー」というタイトルのもと、平成23、24、25年度の各年度とも3回ずつ、現職教員と学生が参加する外国語活動に関するセミナーを開催した（国内版教員養成・教員研修）。いずれも外国語

活動の趣旨の理解を深めながら外国語活動の指導の在り方について探ったものである。その過程において、現職教員と学生が交えた意見交換においても双方にとって得るところが大きかったようである。この研修も、大学、小学校、中学校、教育委員会の連携の上に実施が可能となったものである。今後小中連携の在り方を探る意味でも意義のある機会とすることができそうである。

教員研修のもう一つの試みは、県内小学校教諭 3 名によるオーストラリアの協定大学、グリフィス大学で行われたオーダー・メイドの小学校外国語活動向けの研修である（海外版教員研修）。教員自らが異文化の環境に身を置いて異文化交流を体験すること、また、言語習得に必要な知識や技能を身に着けることの両方の目的をもった研修であった。日本国内ではなく、異文化の生活を体験することも加わった研修の形は、今後外国語活動がグローバル社会のための人材育成の出発点として機能するためにも、教員自身の異文化体験および異文化間コミュニケーションへの積極的な態度の養成は、外国語活動の発展のために効果的であるという結果が得られた。この研修は、大学、海外の協定校、小学校、教育委員会の 4 者の連携により実施されたものである。今後、「地域連携によるオーダー・メイド型研修」の国内版と海外版の充実が期待される。

#### (3)まとめ

3 年間（平成 23 年度～平成 25 年度）にわたる本研究は、日本の FLEX の在り方を模索するとともに、教員養成および教員研修のモデルを提示した。特に、教員養成および教員研修は、大学の知的資源と協定大学を含む人的資源を活用しながら、小学校および教育委員会と連携して地域連携型（国内版、海外版）として実施され得ること、そして、それらは発展性をもつものとして、モデルの提示ができたことは、意義のある研究であったと解釈できる。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

佐々木 雅子、Influence of Knowledge about Second Language Acquisition Research on Foreign Language Teachers、秋田大学教養基礎教育研究年報、査読無、14 巻、2012、69 - 75

〔学会発表〕(計 4 件)

濱田 陽、英語の発音指導、第 7 回秋田大学英語教育オープン研修会、2013 年 10 月 12 日、秋田大学

佐々木 雅子、紙芝居とダンスで外国語活動、第 8 回秋田大学英語教育オープン研修会、2013 年 11 月 16 日、秋田大学

若有 保彦、外国語活動における国際理解、第 9 回秋田大学英語教育オープン研修会、2013 年 12 月 14 日、秋田大学

佐々木 雅子、フィールドインターンシップを活用した発見的問題解決学習、秋田大学評価センターFD/SD シンポジウム、2014 年 3 月 18 日、秋田大学

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.akita-u.ac.jp/eduhuman/flex/>

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

サイクスジョセフ・デンビ(DENBY, Sykes J)  
国際教養大学・国際教養学部・講師  
研究者番号：5 0 5 9 2 9 1 1

##### (2)研究分担者

佐々木 雅子 (SASAKI, Masako)  
秋田大学・教育文化学部・教授  
研究者番号：0 0 2 9 2 3 9 2

濱田 陽 (HAMADA, Yo)  
秋田大学・教育推進総合センター・講師  
研究者番号：0 0 5 8 8 8 3 2

若有 保彦 (WAKAARI, Yasuhiko)  
秋田大学・教育文化学部・准教授  
研究者番号：3 0 4 5 1 6 5 2  
(平成 25 年度より研究分担者)